HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	宇都宮輝夫著『カール・バルト研究』
Author(s)	佐藤, 司郎
Citation	基督教學, 56-57, 37-41
Issue Date	2022-11-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92839
Type	journal article
File Information	03sato.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

書　評

宇都宮輝夫著『カール・バルト研究―絶対的逆説を指さす神学』（新教出版社、二〇二一年）

佐藤　司郎

本書は、著者の半世紀に及ぶカール・バルト研究の成果である。

二十世紀を代表する神学者バルト（一八八六～一九六八）の影響力も、近年、一時ほどではなくなったとはいえ、研究はなお盛んである。その中で本書は、バルトの神学的な核心を徹底解明しようとした野心的な秀作である。著者も所々で自信をのぞかせていて、バルト研究が今後、思想史的なアプローチからなされようと、あるいは各論の展開としてなされようと、まずもって繙かれるべき一書となることは間違いない。

はじめに「まえがき」によって本書全体を、著者自身のパースペクティブに従って紹介し、そのあと内容を辿ってみることにする。

全体は3章からなる。

第1章　バルトの聖書解釈学、そして聖書と啓示
第2章　バルト神学の連続性と発展
第3章　バルトの近代神学史理解

第1章はバルトの聖書解釈論を取り上げる。著者によればバルトの解釈方法論と一般解釈学の方法論は変わらない（必ずしも同一でないことは65頁以後）。ただし解釈の対象・内容は聖書である。そうであればそこに霊感論や啓示論が関わってくる。しかし従来この二つのこと（解釈方法論と啓示論）の関係の解明は十分なされてこなかった。その徹底的な解明を著者は試みている。本書が「新しい相貌」（10頁）を呈しているとすれば、理由はそこにあるという。

第2章はバルト神学の連続性を問題にしている。一般にバルトは大きな変化・転換を遂げた神学者と考えられてきた。一九三〇年代初頭の弁証法から類比（アナロギ

ア）への神学方法論の転換、あるいは初期の、神と人の断絶的理解から、後期、五十年代半ばの、神の人間性の強調への転換などがその典型だと考えられている。しかし本書は、まさにこの「ステレオタイプと化した転換論を最終的に破壊することを目的にしている」（11頁）という。ただし著者によれば、連続性を論証しながら、じつは「究極的な狙いはそこにあるのではなく、バルトが真に伝えたかった内容そのものを明らかにすることにある」（同頁）という。「内容そのもの」とは、ひと言で言えば「福音」ということになるのであろうが、著者のもっとも重要な認識によれば、「『イエスはキリスト』という絶対的逆説」（12頁）である。それを「指さす神学」（副題）がバルト神学なのである。

第3章は、第1、第2章が「思想史的研究」であったのに対して、視点を変え、バルトの近代神学史理解を「歴史学的・社会学的視点から」（12頁）検討したものである。従来あまり顧みられなかった著作（『十九世紀のプロテスタント神学』）が取り上げられる。新たな「視点」から読み解かれる、面白い論考である。

以上は著者によるイントロダクションである。本書の中心は第1、第2章にあるので、もう少し立ち入ってその論旨を辿っておきたい。

第1章で取り上げられるテキストは『ローマ書』（第二版、一九二二年）と『教会教義学』の聖書論（一九三八年）である。聖書論と解釈学に関して前者で提起されながら謎のまま残された問題は、著者によれば後者でほぼ解かれた。

バルトによれば、聖書は「神の啓示についての証言」である（『教会教義学』の聖書論）。この証言の対象は、著者によれば「神人の一致というイエス・キリスト自身である」（41頁）。そして「キリストのこの本性と、神的啓示が人間的証言と不可分の一体をなすことが、相即している」（同）ゆえに、「解釈という人間の作業は必須」（同）となる。著者はそれを「観察」「追考」「同化」と辿り、最後にこの同化について、それは人間が自分の力でつくり出さなければならないのではない、そうではなくて、「神の言葉が主としてわれわれの敷居をまたいでくる。これこそ、ここで考慮しなければならない」（65頁）

のである。これ以後展開される二つの節、「バルトの霊感説」（70頁）と「啓示：神の現臨」（95頁）が第1章の核心部分といってよいであろう。

著者は霊感と啓示をとくに区別しない。両者とも真理が人間に伝達されることである。「人間に啓示が与えられるとは、神人一致という絶対的逆説たるイエス・キリストの実在が人間に伝達されるということである」（78頁）。それが真理として受容されることが可能だとすれば、それは「真理が自己自身とともにあわせて理解の能力（条件）を人間に与えてくれることによってである。これがキルケゴールの言う『瞬間』であり、教義学用語で言えば啓示であり霊感である。そしてそれに応ずる人間の側の真理受容の情熱こそが『信仰』なのである」（80頁）。これが「バルトの霊感説」の要点である。著者が若い時代から親しんだ、とくにキルケゴールが、要所で真理の証人として呼び出され、よい働きをし、本書に花を添えている。

さて「神の言葉としての聖書」（バルト）は、聖霊を通して神の言葉となる。それは、神が教会に対して「現臨」することであり、教会が生成することとも同一視される（95頁）。そこに含まれる諸問題が重要な一節「啓示：神の現臨」で考究される。残念ながらここでは触れることができない。

第2章は挑戦的、論争的な章である。バルト神学の連続性の問題であるが、著者は「神学方法論・認識論における一貫性のみ」（144頁）を問題にする。具体的には「弁証法と類比が同一であることを論証し、それによって初期と後期の間には何らの立場上・方法場の断絶も存しないことを指摘したい」（145頁）というのである。そしてその成否に、自余の連続性の証明はかかっているのである。

弁証法と類比の同一性は存在論的局面（第2節）と認識論的局面（第3節）に分けて詳細かつ精緻に論じられる。遺漏なく論じ切ろうという著者のねばり強さには脱帽である。

さて結局弁証法と類比は、どこで結びつくことになるのだろうか（第4節）。それは、結論的に言えば、キリスト論にほかならない。弁証法的思惟とはキリスト論的思惟にほかならず、類比論もキリスト論の正しい解釈か

ら形成されるべきものなのである。したがってしばしばそう考えられているように、神人関係の断絶的契機を強調しているように考えられた弁証法から、連続的契機に力点をおいているように考えられている類比への概念の変化は、決してキリスト論的集中・思惟という新たな立場の確立、あるいは移行の、反映ではないのである（233頁）。弁証法も類比も「キリスト論から形成された概念」であり、両者ともに「イエス・キリストを指し示している」（237頁）のである。

最後に著者は、神学方法論・認識論、つまり弁証法と類比に限定して論じてきた連続性論が、バルト神学全体についても妥当するのか問うている（238頁以下）。もちろん著者によれば、彼の神学全体についてもそう言えることは言うまでもない。弁証法と類比はたんに神認識の手段だったわけでなく、そもそも神の存在と行為の叙述であったからである。その神がこの神学全体の対象であるかぎりにおいて、全体についても連続性を言うことはできるのである。

第4節の2以下で著者はさらに、時代状況との関連でバルト神学の一貫性、連続性を問題にしている。一九三〇年代の政治的なバルトの登場、あるいは否定から肯定へという、だんだん顕著になる傾向性の変化などを例としながら、「時代状況の変動と連関して生起するバルト神学の変化の只中にこそ、連続性は見いだされるべきである」（251頁）との議論を展開している。別の言い方をすれば「バルト神学においてある特定のことが語られる究極的必然性は、時代状況の中にはなく、彼の神学の主題理解そのものの中にある」（260頁）。バルト神学のこの世への関心と広がり、ないし預言者的な言動にも多分に魅力を感じている評者から見れば、この節は少し還元主義的にも感じるけれど、今日よく試みられる神学の状況関連的理解への問題提起として受けとることもできるであろう。

一読して著者が、初期バルトの諸論文のうち、『聖書における問いと明察と展望』（一九二〇年）から大きな刺激を受けていることを感じた。私もこれを重要論文と見ているので、もしそうであるなら、わが意を得たりである。あそこにはグリューネヴァルトの磔刑図のことが

三回ほど出てくる。当該論文をバルトは磔刑図でカバーを飾って出版したかったけれど、できなかったということを読んだことがある。本書はそれを実現し、バルト神学を洗礼者ヨハネの「指」のごとく十字架のイエス・キリストを指し示す神学として明らかにした。優れた研究書の出版をともに喜びたい。

書　評

小林昭博著『同性愛と新約聖書』（風塵社、二〇二一年）

山吉　裕子

本書は、クィア理論を用いた聖書解釈についての著作を精力的に発表している著者が、二〇〇七年に関西学院大学大学院神学研究科に提出した博士論文「同性愛と新約聖書―セックス・ジェンダー・権力構造」を大幅に増補改訂し、刊行したものである。全体は十章から成り、序にあたる第一章とまとめの第十章を除くと、「性」に関する議論の前提となる概念や研究史について論じる前半部（第二章―第四章）と、「同性愛」に関係すると言われている聖書（主として新約聖書）のテクストを釈義的・解釈学的に検討する後半部（第五章―第九章）に大別される。